

好きなバンドや役者さんや伝統芸能に思いを馳せるたび、「たにまち」という言葉が浮かぶ。もし私に三兆円あったら、アルバム制作費も主演映画制作費も舞台制作費も全部出すのだが！

ご自身の力で輝いているかたばかりなので、私のようなたにまちは必要ないでしょうけれど……。あと、三兆円は多すぎるか？ 三億円ぐらいか？ 財布に三万円以上入ってたことがないので、いくらあればたにまちになれるのか、基準がわからない。

たにまちは本来、相撲のひいき筋を指す言葉のようだが、「とにかく応援したい！」という熱い思いと財力を兼ね備えたかたちだろう。憧れた。私がついにまちなちになったら、映画の内容に「あなただけの口を出してしまいたいけど、あなたをよりきらめかせるのは、アクション映画だと思おうの！」など、真のたにまちはむろん、黙ってお金を出すのみのはず。そこもかっこいい。

「稼いだお金をなかに使うか」に、品性が表れる気がする。蓄財とかマンション購入とかにあるのではなく、稼いだはしから「応援」にまわす。自分以外のだけかのため、自分以外のだけかへの愛を表明するため、金を稼ぎ、使う。私はそれを、非常に崇高であると同時に、自身の欲望にある意味で正直な、まっとうな行いだなど感じる。

しかし当然、たにまちなれるほどの稼ぎが



絵・江口修平

たにまち願望

三浦しをん

ないので、脳内会議室のテーブルに札束を積みあげる夢想をするだけに終わる。これじゃただの成金みただ、と夢想のなかの自分にがっかりする。スマートなたにまちなちになるのは、(夢想といえど) むしろかしい。欲望のきらつきをなるとけ抑え、無私の精神で応援できる品性を養うべく、脳内たにまち修業はつづく。

では現実の私が、なにお金を使っているかというと、大半が創作物だ。本や漫画を買ったり、CDやDVDを買ったり、ライブや劇場に行ったり、といったことにほとんどの時間とお金を費やしている。「プチたにまち活動」と言えるかもしれない。貯金？ 老後？ 捨て置き。次の瞬間には車にはねられて死ぬかもしれないのに、老後のことなど考えてどうする。

いや、三〇歳ぐらいのときは、「こんな不安定な仕事で、老後とかどうすればいいんだろう」と不安でならなかった。貯金もちょっとしてみたりした。でも、だんだんどうでもよくなってきた。不安定なのはあいかわらずだが、不安に慣れたのである。

もしかししたら今後、揺り戻しが来て、少しは貯金に励むようになるのかもしれない。それでもやっぱり、「プチたにまち活動」はやめられないだろう。お金を、「応援」と「愛の表明」に使う人間でありたいと思っている。

みうら・しをん●1976年東京生まれ。2000年、小説『格闘する者に〇』でデビュー。2006年『まほろ駅前多田便利軒』で直木賞を、2012年『舟を編む』で本屋大賞を、2015年『あの家に暮らす四人の女』で織田作之助賞を受賞。小説に『風が強く吹いている』『神去なあなあ日常』など、著作多数。最新刊は『ぐるぐる♡博物館』。小説『光』が映画化され、11月より全国公開。



撮影：松蔭浩之